

1. 年齢 (1582年/天正10年時点)

羽柴秀吉	1537年生	46歳	徳川家康	1543年生	40歳
織田信雄	1558年生	25歳	酒井忠次	1527年生	56歳
織田信孝	1558年生	25歳	榊原康政	1548年生	35歳
三法師	1580年生	3歳	本多忠勝	1548年生	35歳
丹羽長秀	1535年生	48歳	井伊直政	1561年生	22歳
柴田勝家	1522年生	60歳	本多正信	1538年生	45歳
滝川一益	1525年生	58歳	石川数正	1533年生	50歳
池田恒興	1536年生	47歳	北条氏政	1538年生	45歳
前田利家	1538年生	45歳	北条氏直	1562年生	21歳
羽柴秀長	1540年生	43歳	森長可	1558年生	25歳
羽柴秀次	1568年生	15歳	堀秀政	1553年生	30歳
黒田孝高	1546年生	37歳	羽柴秀勝	1567年生	16歳

2. 時系列

1582年 (天正10年)

6月2日	本能寺の変
6月5日	家康、岡崎城に帰還
6月13日	山崎の戦い
6月15日	家康、鳴海で山崎の戦いの結果を知り引き返す
6月16-19日	神流川の戦いで滝川一益が北条氏直・北条氏邦に敗北し箕輪城を放棄
	甲斐を支配していた河尻秀隆、武田家の残党に襲われ討死
6月27日	清須会議 織田家の家督は三法師が継ぐ、信雄は尾張、信孝は美濃、三法師は近江坂田郡と安土城を相続し、三法師の後見は信孝と柴田勝家が務めることとした。 羽柴秀勝(織田信長の4男で秀吉の養子)は明智光秀の旧領である丹波国を継承 羽柴秀吉は山城国と河内国を加増 柴田勝家は越前国を安堵 + 長浜城と北近江3郡を羽柴秀吉から勝家に譲渡 丹羽長秀は若狭国を安堵 + 近江国の2郡 池田恒興は摂津国から3郡を加増
7月3日	家康、浜松を出発、9日に甲府入り
7月3日	浅間山噴火 (2月16日に続いて2回目)
7月7日	秀吉、軍勢を派遣して上・甲・信3か国を確保することを認める書状を家康に送る。 →天正壬午の乱 家康軍1万人、北条軍2万余
8月12日	鳥居元忠が黒駒で北条方の軍を打ち破る。家康軍善戦
8月	信雄と信孝、尾張と美濃の国境を境川にするか木曾川にするかで揉める
9月下旬	北条側の真田昌幸、徳川方に寝返る。木曾義昌も北条から徳川方へ
10月頃	お市の方と柴田勝家結婚

10月6日	柴田勝家、秀吉が清須会議の結果に違反しているとの弾劾状を諸大名に送る
10月11-18日	大徳寺で羽柴秀勝を喪主にして信長の葬儀が行われる。 15日は3000人が参加し、棺を運ぶ御輿の前に池田輝政、後ろに秀勝、信長の八男の長麿が位牌を持ち、信長の愛刀 不動国行を秀吉が拝持した。
10月28日	安土城の再建まで三法師は岐阜で信孝が預かる約束→信孝がそのまま三法師を抱え込んでしまう。 これは謀反であると断じた羽柴秀吉・丹羽長秀・池田恒興の三宿老は、清洲会議の決定を反故にし、三法師が成人するまで織田信雄を暫定的な織田家当主として主従関係を結ぶ。後に徳川家康も賛同して信雄を支持。
10月29日	織田信雄を仲介役として北条と家康の間で講和が結ばれる。氏直に家康の娘督姫を娶らせ、甲斐・信濃は家康に、上野は北条にそれぞれ切り取り次第とし、相互に干渉しないこととした。 ⇒ <u>北条との関係強化により関東の戦乱を鎮静化する意図</u>
11月2日	柴田勝家、前田利家を介して秀吉と一旦和睦。冬は雪で行動が制限されるための和睦であることを見抜いていた秀吉は、逆に前田利家を調略した。
12月2日	三法師は安土城へ移ることが清洲会議で決定していたが、信孝が三法師を岐阜城から離さなかったため、これを謀反の口実として、秀吉は柴田勝豊がおさえる長浜城を攻撃し降伏させる。
12月20日	秀吉、岐阜城の信孝を降伏させる。三法師を秀吉に引き渡すとして安土へ送り、母の坂氏や乳母、娘らを人質として供出して和睦した <u>信雄、安土城への入城・伊勢神宮遷宮事業の信長からの引継ぎ、安土町中への定書発布など信長後継としての権限行使。政権内の武将も信雄の許に参礼し新たな当主としての姿勢を示す。信雄は家臣への書状内に「天下泰平、国家安全之節候…」との文言を用い、天下人としての自覚を持つ</u>

1583年(天正11年)

1月	滝川一益、柴田勝家側について挙兵
2月4日	上杉家と織田家の和睦の書状が秀吉に届く。柴田勝家を挟撃するため
2月中旬	滝川一益の本拠地である長島城を攻めるが頑強な抵抗に遭う
3月12日	柴田勝家、佐久間盛政、前田利家らと3万の軍で近江柳ヶ瀬に布陣。秀吉は信雄と蒲生氏郷を伊勢に残して3月19日に5万といわれる兵で木ノ本に布陣
4月16日	信孝が滝川一益と結んで岐阜城で再び挙兵。秀吉配下の稲葉良通の所領を焼き討ち。
4月20-21日	賤ヶ岳の戦い
4月23日	北ノ庄城落城、柴田勝家とお市の方、自害
4月29日	岐阜城を包囲された信孝は降伏、内海に身柄を移され切腹。切腹の際、腹をかき切つて腸をつかみ出すと、床の間にかかっていた梅の掛け軸に臓物を投げつけたといわれる。
5月21日	信雄、前田玄以を京都奉行に任じるが、難題がある時は秀吉の指示に従うよう命じる。 <u>洛中支配に関する指示伝達には信雄の「墨付」が必要であると定める。他の武将(佐々成政)から「上様」と敬称され、織田家当主としての地位がうかがわれる。秀</u>

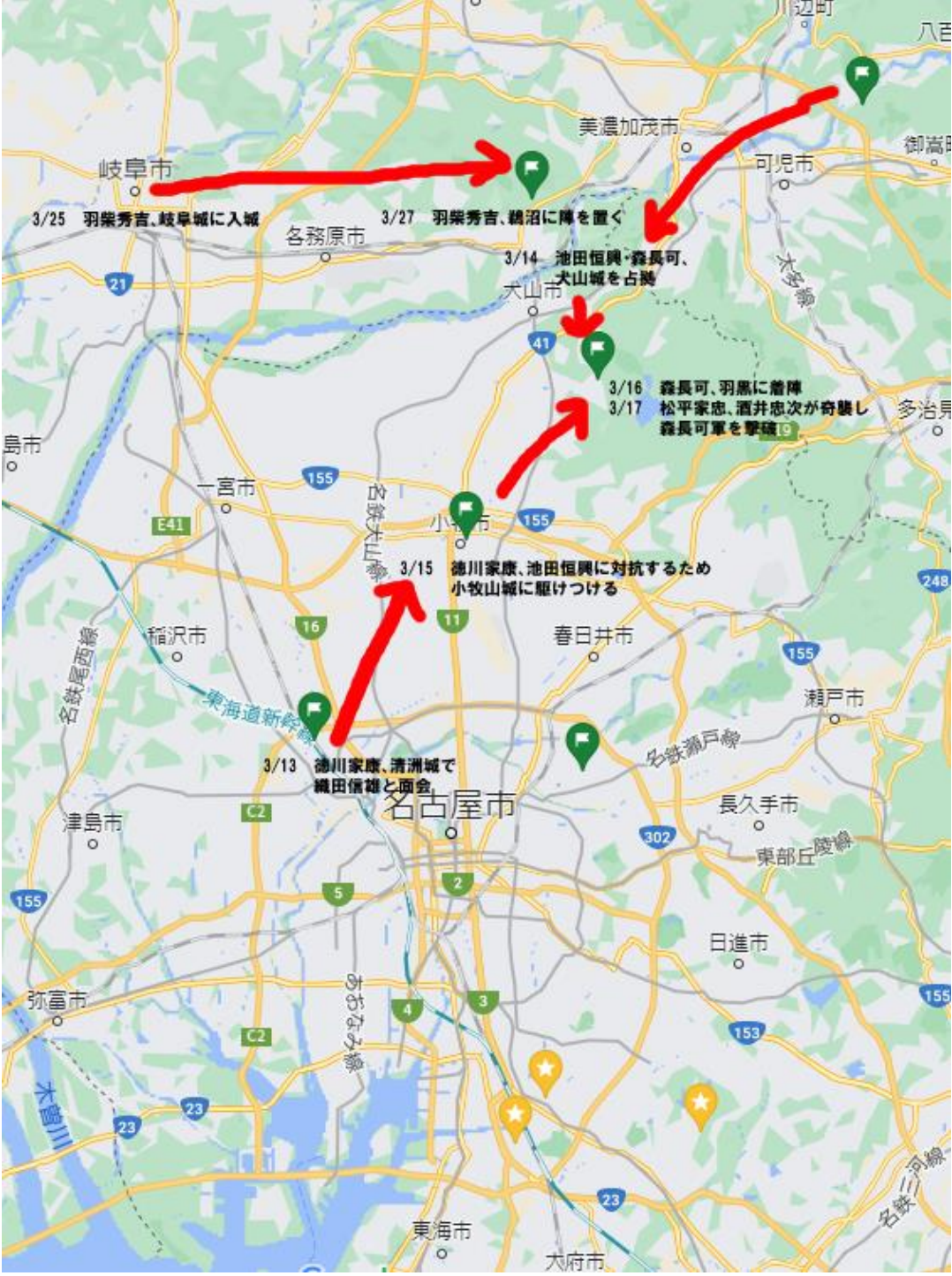
	<p>吉は指南役として信雄を補佐。(秀吉による権力行使はあくまで信雄の存在を前提に)</p> <p>※ 補注</p> <p>(1)信雄と秀吉の関係に対する周囲の認識</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 朝廷…賤ヶ岳合戦後の秀吉上洛に際し、公家衆は信長上洛の際の様に大勢で出迎える(「兼見卿記」より) <ul style="list-style-type: none"> →秀吉に好意的 ・ 宣教師…信長後継としての天下支配は秀吉にあったと認識 ・ 政権内…秀吉は信雄の指南役に過ぎず、あくまでも当主は信雄 <p>(2)朝廷・宣教師・政権内における認識の差の原因</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 秀吉に対する公家の見方 <ul style="list-style-type: none"> …清須会議後の京都支配は山城を獲得した秀吉が主導。自身の家臣を京都奉行に任命し、京都を実質的に支配。勢力争いに敏感な公家の性質により、より強力な庇護者である秀吉に接近 ・ 信雄に対する公家の見方 <ul style="list-style-type: none"> …賤ヶ岳戦い後によりやく京都支配に着手し、公家とのつながりが薄い →ゆえに信雄は秀吉に京都支配を一任、秀吉は広範な権力行使を可能に。結果、朝廷による秀吉依存をもたらす <p>⇒秀吉による強大な権限行使という実態と、政権内部の建前(信雄が天下人という認識)とが乖離し、関係悪化をもたらす・・・開戦の一因に</p>
5月25日	秀吉、池田恒興から大坂の地を譲られる。代わりに恒興は大垣を、息子の大助は岐阜を与えられる。
6月	秀吉、洛中洛外に七か条の掟を下す。(行政経験豊富な秀吉を頼らざるを得ない状況)
6月	上杉家が秀吉に戦勝祝いの太刀や馬を送り、翌月に景勝の養子、義真を人質に出す。
	信雄は三法師の後見として安土城に入ったがすぐに秀吉によって退去させられ、これ以後信雄と秀吉の関係は険悪化。 <u>信雄は天下人の座を追われ、京都支配は頓挫(秀吉による天下人としての政権成立説あり)</u> 。秀吉から年賀の礼に来るように命令されたことを契機に秀吉に反発し、対立するようになる。
5月～7月	関東地方から東海地方一円にかけて大規模な大雨が相次ぎ、徳川氏の領国も「50年来の大水」(家忠日記)に見舞われる。
7月下旬頃	滝川一益が長島城を退く。その後剃髪し蟄居
8月頃	大坂城の普請が開始。黒田孝高と前野長泰が監督的な立場となる
10月	10月以降、頻繁に織田家中の人物を招いた秀吉主催茶会を大坂城で開き、織田家重臣に親秀吉派を形成。旧信長家臣前田利家や信雄配下の武将である津川雄光、岡田重孝、織田長益、瀧川雄利、武田左吉など⇒信雄が秀吉支持派の拡大を危惧
11月	16日：三井寺において信雄と内大臣近衛信輔(信長死後、信長と親密な関係にあった近衛前久は京都を追われ、同家は秀吉以外の庇護者を求めている)会見 20日：信雄切腹の風聞が流れる ⇒近衛家との接触は、信雄に対する秀吉の疑念を抱かせるきっかけの一つ 秀吉が信雄に大坂城への出仕を要請するも拒否し続ける⇒関係悪化

1584年（天正12年）

1584年時点の石高 <https://www.youtube.com/watch?v=wq3ZSfseCtg>

北条氏 174万石、豊臣氏 149万石、徳川氏 103万石、織田氏 61万石

1月1日	近江国坂本の三井寺で信雄と秀吉が会見したが決裂し、信雄は伊勢長島城に戻る。信雄は家康に接近し同盟関係を結ぶ。 <u>※天正壬午の乱後、徳川北条関係強化に反発した反北条諸氏が秀吉に接近。家康は北条との関係を維持して関東の反北条諸氏および秀吉と対立するか、北条と対立するかを迫られる⇒秀吉打倒を選択し、信雄と結託</u>
2月～	<u>秀吉家臣脇坂安治により信雄領伊賀への侵攻（開戦後3月説もあり）。滝川雄利が守備する上野城を攻めとる</u>
3月6日	<u>この三日前に家康は三河・遠江に徳政令を発し戦争に備える。信雄信雄の家老の津川義冬・岡田重孝は秀吉に近かったが、徳川家康と同盟を結んだ信雄は二人を処刑（浅井長時（田宮丸）を含む説もあり）する。信雄からは家康に相談があった（真田家宝物館所蔵文書）</u> →三重臣が秀吉に近かったことによるが、それを理由に殺害することは、 <u>則ち秀吉への宣戦布告。同時に家臣の吉村氏吉に人質の指出を要請</u> 激怒した秀吉は、信雄に対し出兵を決断した。
3月7日	信雄が香宗我部親泰に「天下をほしいままにする秀吉と同心した家臣を殺害した、近いうちに上洛するので協力してほしい、毛利に声をかけてほしい」という書状を送る。 吉田（豊橋市）にいた家康は西に向かい、伊賀・大和からの援軍と合流
	紀州の雑賀衆・根来衆や四国の長宗我部元親、北陸の佐々成政、関東の北条氏政らが、信雄・家康らと結んで秀吉包囲網を形成し、秀吉陣営を圧迫。本多忠勝は丹波国の国衆を支援。
3月9日	<u>秀吉、津川義冬家臣に伊勢の関地蔵まで出陣を命じる</u>
3月10日	秀吉、大坂から上洛して数万の軍勢を参集させ、尾張に向かわせる。（兼見卿記）
3月11日	秀吉、坂本に移動。黒田孝高と蜂須賀正勝に、中国方面は宇喜多家に任せて戻るように書面で指示を出す。
3月11日	<u>三好信吉を対象とする近江衆に秀吉が近江永原への布陣を命じる</u>
3月12日	<u>秀吉、兵力動員予定について丹羽長秀に報じる（伊勢へ先手として蒲生氏郷を派遣することを計画）</u>
3月12日	信雄方の神戸城主 神戸正武、蟹江城主佐久間正勝、犬山城主中川定成が、秀吉側についた関信盛、一政親子が守る北伊勢の亀山城を攻撃
3月13日	亀山城に蒲生氏郷、堀秀政、長谷川秀一、滝川一益の軍が駆けつけて救援。蒲生氏郷らはそのまま信雄側の峰城を攻撃する。家康は援軍として酒井忠次らを送るが、犬山城が落ちたことで呼び戻す。
3月13日	家康、清州城で信雄と面会。（吉村文書） <u>秀吉、伊勢に先鋒として蒲生賦秀、長谷川秀一、堀秀政、日根野弘就・重之、瀧川一益を派遣。関から 近江甲賀にかけての通路上の城には多賀常則、池田景雄、山崎片家、浅野長吉、一柳直末を配する。美濃方面には三好秀次を永原、羽柴秀長を守山、羽柴秀勝を草津、細川忠興を瀬田、加藤光泰・堀尾吉晴・木村重茲を甲賀に配置。伊賀の筒井順慶には伊藤祐時を補佐につけ伊勢へ出陣</u>

	<p>させる。家康の陣は先鋒である酒井忠次部隊が7日に陣触をうけ、8日に岡崎から矢作川まで進軍、阿野、鳴海、山崎をへて13日に津島、14日には伊勢桑名に到着</p>
<p>3月14日</p>	<p>池田恒興と森長可、中川定成が不在の犬山城を夜襲し一日で占拠。(池田は織田につくと見られていて、伊勢が戦場になると考えられていたが、秀吉は池田に、美濃・尾張・三河の3ヶ国を与えるという破格の条件で味方に引き込んだ)</p> 
<p>3月15日</p>	<p>関一政、蒲生氏郷、滝川一益らの働きで峯城（伊勢）攻撃勝利。 中川定成は敗走途中に討死、佐久間信榮は尾張に逃げる。</p>
<p>3月15日</p>	<p>家康と信雄、池田恒興に対抗するため16,000の兵を率い小牧山城に駆けつける (この時、家康は清洲、信雄は長島にいる。小牧入りは3/29)</p>
<p>3月16日</p>	<p>森長可が兼山城を出て、羽黒（犬山市）に池田勢より突出したかたちで着陣。</p>

	この動きはすぐに徳川軍に知られ、同日夜半、松平家忠・酒井忠次ら 5,000 人の兵が羽黒へ向けてひそかに出陣する。
3月17日	早朝、酒井勢は森勢を奇襲。酒井勢の先鋒、奥平信昌勢 1,000 に対抗し、押し返していた森勢だったが、側面から入ってきた松平家忠の鉄砲隊の攻撃により後退し、さらに酒井勢 2,000 が左側より背後に回ろうとするのを見て敗走。森勢の死者 300 余人。
3月18日	敵襲の心配がなくなった家康は小牧山城を占拠し、周囲に砦や土塁を築かせ羽柴軍に備える。
3月20日	神戸城が落城、攻めていた滝川一益がそのまま城に入る。
3月20日	伊勢方面で松ヶ島城に信雄方滝川雄利が籠城、秀吉軍勢 2 万で包囲中。天守を残すのみとなる
3月21日	秀吉、三万の兵を率いて大坂城を出発。美濃池尻に進軍、24日に岐阜到着、27日に鶴沼、29日に木曾川を越え尾張楽田に着陣
3月22日	根来・雑賀衆は二手に分かれ、一手は土橋平丞兄弟を将として 4,000 - 5,000 人で岸和田城を攻撃した。もう一手は堺を占領して堺政所・松井友閑を追い払った。 26日には住吉や天王寺に進出して大坂城留守居の蜂須賀家政・生駒親正・黒田長政らと戦った。未だ建設途上の大坂の町は全く無防備で、紀州勢は大坂の街を破壊し焼き払いつつ侵攻した。また盗賊が跋扈し略奪が横行し、その治安の悪化は安土炎上時に匹敵したという。最終的には大坂は守られ、紀州勢は堺・岸和田からも撤退した。この戦いを岸和田合戦という 信雄が長島城に籠っていることが報じられる。秀吉岐阜に向かう
紀州の戦い	3月から根来・雑賀衆及び粉河寺衆徒が秀吉の留守を狙って堺や大坂に攻め寄せたり、岸和田城にも攻め寄せたが、中村一氏と松浦宗清が戦いの末にこれを守りきっている。この和泉の攻防により、秀吉は6月21日～7月18日、7月29日～8月15日、10月6日～10月25日と戦場を離れ大坂城に帰還している。
3月25日	秀吉、岐阜城に入城し、清州城を攻撃することを伝えた。
3月27日	秀吉、鶴沼（各務原市）に陣を置く。28日、家康は小牧に陣替えする。ここまでの間で両軍が砦の修築や土塁の構築を行った為、双方共に手が出せなくなり戦況は膠着状態に陥る。（27日に犬山城に入り、28日楽田城に本陣を設けたという情報もある）
3月28日	秀吉、木曾川を渡河。
3月29日	信雄が長島から小牧山に移り家康と合流 秀吉軍 8 万、家康・信雄軍 1.6 万（諸説あり）
4月4日	池田恒興、兵を三河に出して空虚を襲い各所に放火して脅威すれば徳川は小牧を守ることができなくなるであろうと秀吉に献策
4月5日	朝、恒興は秀吉のもとをまた訪れ、森長可とともに羽黒戦の恥を雪ぎたいと述べた。秀吉はついに許可し、明6日三河西部へむけて前進すべしと命令。 第一隊 - 池田恒興 - 兵 5,000 人 第二隊 - 森長可 - 兵 3,000 人 第三隊 - 堀秀政 - 兵 3,000 人 第四隊 - 羽柴秀次 - 兵 9,000 人

4月6日	長久手への進軍
4月7日	家康、羽柴秀次勢が篠木（春日井市）・上条城の周辺に2泊宿営した頃に、近隣の農民や伊賀衆からの情報で秀次勢の動きを察知。
	<p>4/5 池田恒興と森長可、三河を衝くことを秀吉に進言して認められる</p> <p>4/7 上条城の周辺に野営中、徳川軍が秀次軍の動きを察知</p> <p>4/8 24時 小幡城に家康本隊到着</p> <p>4/9 2時 色金山に徳川本隊着陣</p> <p>4/9 6:35頃 堀秀政、秀次の敗報を聞いて引き返す。徳川方を返り討ちにする</p> <p>4/9 10時頃 若崎城から引き返した池田・森勢が徳川本隊と激突</p> <p>4/9 未明、池田勢が若崎城を攻撃、数時間で落城</p> <p>4/9 4:35頃 秀次軍を榊原康政らが奇襲し撃破</p>
4月8日	<p>地元の丹羽氏次・水野忠重と榊原康政・大須賀康高ら 4,500 人が支隊として小牧を夕方に出発して、20 時小幡城（名古屋市守山区）に入り、付近の敵情を探った。家康と信雄の主力 9,300 は 20 時小牧山を出発し、24 時小幡城に着陣。</p> <p>織田・徳川軍は主力の到着にともない小幡城で軍議をおこない、兵力を二分して各個</p>

	<p>に敵を撃破することに決した。</p> <p><u>尾張方面では岩崎山・内久保・青塚・田中・二重堀に秀吉が陣取り、要害として構えるよう命じる。伊勢松ヶ島城より信雄方の城将滝川雄利が退城</u></p>
4月9日	<p>2時</p> <p>織田徳川本隊、小幡城を出発して東へおおきく迂回し、4時30分ごろ権堂山付近を過ぎて色金山に着陣。</p> <p>未明</p> <p>池田恒興勢は丹羽氏重（氏次の弟）が守備する岩崎城（日進市）の攻城戦を開始。氏重らは善戦したが、約三時間で落城し玉砕した（岩崎城の戦い）。</p> <p>この間、羽柴秀次、森長可、堀秀政の各部隊は、現在の尾張旭市、長久手市、日進市にまたがる地域で休息し、進軍を待った。しかし、その頃すでに徳川軍は背後に迫っていた。</p> <p>4時35分ごろ</p> <p>白山林（名古屋市守山区・尾張旭市）で休息していた羽柴秀次軍を、後方から水野忠重・丹羽氏次・大須賀康高勢、側面から榊原康政勢が攻撃。この奇襲によって秀次勢は潰滅。秀次は自身の馬を失い、供回りの馬で逃げ遂せた。また、目付として付けられていた木下祐久やその弟の木下利匡を初めとして多くの木下氏一族が、秀次の退路を確保するために討ち死にした。</p> <p>6時35分ごろ</p> <p>羽柴秀次勢より前にいた堀秀政勢に、第四隊に参加していた長谷川秀一の遣いから秀次勢の敗報が届く。堀勢は直ちに引き返し、秀次勢の敗残兵を組み込んで桧ヶ根に陣を敷き、迫り来る徳川軍を待ち構えた。秀次勢を撃破して勢いに乗った徳川軍は、檜ヶ根（桧ヶ根、長久手市）辺りで堀勢を攻撃したが、返り討ちにされて逆に追撃された。徳川軍支隊の死者280余とも500人ともいう。</p> <p>別働隊の戦勝と敗退を知った織田徳川本隊、岩作をとおり富士ヶ根へ前進して堀秀政勢と池田恒興・森長可勢との間を分断した。この時、秀政は家康の馬印である金扇を望見し、戦況が有利ではないことを判断、池田と森の援軍要請を無視して後退した。</p> <p>岩崎城を占領した池田恒興、森長可に徳川軍出現の報が伝わり、両将は引き返しはじめた。そのころ、家康は富士ヶ根より前山に陣を構えた。両軍が対峙する。</p> <p>右翼 家康 3,300人 左翼 井伊直政勢 3,000人、これに織田信雄勢 3,000人。</p> <p>右翼 恒興の嫡男・池田元助（之助）、次男・池田輝政勢 4,000人 左翼 森勢 3,000人 後方 池田恒興勢 2,000人</p>

	<p>10時ごろ</p> <p>両軍が激突。戦闘は2時間余り続いた。戦況は一進一退の攻防が続いたが、前線に出て戦っていた森長可が狙撃されて討死して池田・森軍左翼が崩れ始めると、徳川軍優勢となった。池田恒興も自勢の立て直しを図ろうとしたが、永井直勝の槍を受けて討死にした。池田元助も安藤直次に討ち取られ、池田輝政は家臣に父・兄は既に戦場を離脱したと説得され、戦場を離脱した。</p> <p>やがて恒興・森勢は潰滅、合戦は徳川軍の勝利に終わり、追撃したのち小幡城に引きあげた。この日の長久手の戦いにおける羽柴軍の死者2500余人、織田徳川軍の死者590余人という</p> <p>秀吉、陽動として小牧山へ攻撃をしかける。午後に入って白山林で秀次が敗れたとの報が届き、秀吉は3万の軍勢を率いて戦場近くの龍泉寺に向けて急行した。しかし、500人の本多忠勝勢に行軍を妨害される。</p> <p>夕刻：「家康は小幡城にいる」との報を受け、秀吉は翌朝の攻撃を決める。</p> <p>夜：家康と信雄は小幡城を出て小牧山城に帰還。</p>
4月9日	羽柴秀長、伊勢松ヶ島城を開城させる。
4月10日	家康と信雄が小牧山城に帰還したとの報を聞き、秀吉は楽田に退いた。 <u>家康、本願寺に対して加賀一国の安堵を条件に、味方となるよう働きかける。</u>
4月11日	<u>落城させた伊勢松ヶ島城の攻略にあてていた兵すべてを尾張の秀吉陣に着陣させる</u>
4月12日	<u>秀吉：信雄方が尾張に兵を入れたので、対抗して美濃あたりへ人数を派遣すべきとの注進により、岐阜城在陣の羽柴秀勝の人数2000程を派遣するよう指示</u>
	<u>秀吉：14日、竹鼻城攻撃を意図し美濃西部へ兵を派遣。16日、美濃長池の普請を一柳直末に命じる</u>
4月21日	<u>池田輝政に羽柴方の人数が加わり今尾（美濃）に進出し、信雄方の脇田（美濃）へ攻めかかるも守備。秀吉方の人数はいまだ今尾に在陣。</u>
4月26日	<u>秀吉、北尾張から木曾川を渡り美濃鵜沼に移動。秀吉不在となり、信雄は尾張に残る敵陣に夜討ちを仕掛けるが大きな戦闘にならず、5月3日に長島へ帰る</u>
時期不明	信濃の木曾義昌が家康を裏切って秀吉につく
5月1日	秀吉、小牧に入る（本当？）
5月3日	<u>荒木重賢らが竹ヶ鼻、祖父江に放火し加賀野井城を攻撃。家康方先鋒として本多忠勝が鉄砲衆を連れ萩原（尾張）まで来る</u>
5月4日	<u>羽柴秀勝、加賀野井城攻撃を開始、7日に落城、さらに奥城攻撃を開始</u>
5月6日	加賀野井城は落城、秀吉は息を吹き返す
5月7日	信雄配下の織田信張、香宗我部親泰に摂津播磨への出兵を要請。5月14日に家康も要請
5月24日	竹ヶ鼻城が秀吉に包囲され水攻めを受ける。信雄・家康の援軍が遅れる
6月2日	<u>尾張・美濃境の木曾川から水を入れ竹鼻城の小屋が沈む</u>

6月3日	信雄、水攻めに抗するのは困難だろうから城を捨てて長島城に来よう城主の不破広綱に伝える。
6月7日	<u>竹鼻城落城のため城主を助命し、今日より荷物を運び出し、10日に不破退去</u>
6月8日	<u>羽柴秀長が宿所普請のため近江土山に派遣される</u>
6月10日	竹ヶ鼻城開城。6月8日、秀吉は墨俣まで戻り山上宗二、津田宗及と茶会
6月12日	家康、小牧山城の守衛を酒井忠次に任せて清州城に移る。蟹江城を攻撃開始。
6月13日	秀吉、岐阜城に立ち寄る。
6月11日	長宗我部元親が十河存保の十河城を落とし、讃岐平定を成し遂げている。 家康は元親に「3カ国を与えることを約束した上で渡海して摂津か播磨を攻撃してほしい」（8月19日付の本多正信の親泰宛の書状で「淡路・摂津・播磨」としている。また信雄は香宗我部親泰に備前を与えるとしている）と求め、秀吉も元親の動きを恐れて小牧在陣中に大坂に帰ったりしている <u>12日までに家康は清州に退陣、小牧は酒井忠次が守る</u>
6月16日	滝川一益が九鬼嘉隆の安宅船と共に、信雄の長島城と家康の清州城との中間にあった蟹江城、下市場城、前田城を海上機動にて落城させる。
6月18日	家康、蟹江城の外構に放火。下市場城を奪還。信雄、九鬼の船を奪い伊勢湾の制海権を握る。
6月23日	家康、前田城を奪還。
6月27日	上杉景勝、秀吉に人質を差し出し同盟関係を結ぶ。北条氏は家康の援軍に行けなくなる。秀吉は息を吹き返す
6月28日	秀吉、大阪城に戻る。これを受け家康も小牧山城を酒井忠次に任せ、清州城に移る。
7月前後	<u>家康、「上洛」の意図（天下取りへの意欲）を示す</u>
7月2日	<u>秀吉、有馬で湯治する（7日まで）</u>
7月3日	<u>秀吉、8月15日の三河・遠江への出兵を企画、周囲に報じる（実行できず）</u> 家康、蟹江城を奪還。滝川一益は船で逃亡。秀吉は激怒し一益はその後没落する。
7月6日	秀吉、丹羽長秀に書状を送る。 秀吉は戦地に居なかったため対応が遅れ、伊勢に羽柴秀長、丹羽長重、堀秀政ら6万2千の兵を集め、7月15日に尾張の西側から総攻撃を計画したものの、蟹江城が落城したため8月に延期する。越前、能登、越中の軍が8月に陣出することに合わせる。秀吉自身も病気になる。
7月9日	秀吉、東上すべく大坂から近江坂本に向かう。
7月13日	家康、伊勢国から清州城に戻る。7月17日に松平家忠が軍勢の半分を三河に返しているの、当面戦いはないと判断？
7月13日	越後と上野の境目で戦い、7月22日に北条氏が敗退
7月15日	<u>秀吉、美濃へ出立。秀吉は短期決戦であることを想定していた</u>
関東の戦い	5月初旬から8月にかけて、北条氏直率いる北条軍と、佐竹義重、宇都宮国綱、佐野宗綱、由良国繁、長尾顕長らの間で合戦が起きた（沼尻の合戦）。佐竹義重・宇都宮国綱は秀吉と頻りに連絡を取り合い、上杉景勝は秀吉の命により信濃出兵をし、北条氏を牽制している。一方、北条氏は先年の家康との講和を発展させ、対秀吉の攻守同盟を結んでいた形跡があり、北条氏は本合戦の直後に小牧・長久手の戦いに参陣しようとし

	た動きがあった。
8月2日	上杉景勝、信濃国に出陣。家康を挟撃する形になる。
8月16日	秀吉、大坂城から楽田城に入る。(17日に大垣に到着という話もある)
8月19日	秀吉の先勢が尾張の小口、羽黒に至る。
8月26日	秀吉、木曾川を越えて尾張に入る
8月28日	秀吉、清州に軍勢を送りこみ放火させる。 家康、岩倉城に入り、双方、楽田と岩倉において対陣するも小競り合いに終わる。
9月	徳川家康方の菅沼定利、保科正直、諏訪頼忠が木曾谷の妻籠城に攻め寄せたが、木曾義昌の重臣山村良勝が撃退。
9月6日	秀吉から侍女の「いわ」への手紙で、和睦を結ぼうとしていることを伝える。 秀吉有利の状況。
9月7日	和睦が決裂。石川数正、酒井忠次が交渉に当たる。決裂理由は不明。 和睦の条件は信雄の娘、於義伊(結城秀康)、久松定勝(家康の異父弟)、石川数正の実子、織田長益、滝川雄利の実子を人質に差し出すこと。 <u>家康、重吉(尾張)へ移動</u>
9月9日	家康に呼応した佐々成政が能登国の末森城(石川県宝達志水町)を約1万の兵で総攻撃し落城寸前にまで至らしめたが、前田利家の反撃に遭って退却した
9月15日	戸木城(三重県津市)に籠っていた木造具政ら織田軍が蒲生氏郷ら羽柴軍と合戦を行い、羽柴軍が勝利する。 秀吉は加賀井重望が守る加賀野井城など、信雄の本領である美濃、北伊勢の諸城を次々と攻略してゆく。
9月26日頃	秀吉、岐阜に兵を引き揚げる
9月27日	家康、清州に入る
9月29日	秀吉、大坂に戻る。
10月2日	<u>秀吉、尾張から坂本を経て上洛、6日に大坂帰還</u>
10月11日	<u>家康、清州から小牧へ巡視し、松平家忠に小幡城の定番を命じる</u>
10月15日	秀吉、従五位下左近衛権少将に叙位任官される。
10月24日	秀吉、近江国土山に着陣、25日に伊勢国神戸に出陣することを伝えた。尾張に攻め込む予定だった。桑名に攻め込んで刈田を行うことを命じると共に、本願寺の坊官、下間氏に和睦の執り成しを依頼。
10月下旬	秀吉、信雄の領国である南伊勢を攻略したあと、北伊勢地域を攻撃
11月5日	<u>秀吉、羽津へ着陣。明日6日、桑名へ出陣して桑部(伊勢)と柿多(伊勢)を攻略</u>
11月6日	すでに秀吉は長島城直近の桑名まで進出(水口加藤文書ほか)
11月9日	家康は信雄救援のため、北伊勢への出陣を計画し清州に出馬(家忠日記)
11月10日	秀吉方の長久保城を落とす
11月12日 (13日?)	<u>信雄居城の長島城を攻略する様子を感じ取り、信雄が講和を申し入れる。</u> 伊賀と南伊勢の割譲を条件に、秀吉が信雄に講和を申し入れ、15日に和議が成立。伊賀は脇坂安治、南伊勢は蒲生氏郷ら秀吉方大名に分け与えられた。講和条件として <u>犬山城・河田城(秀吉方の人数を入れる)以外の新しく築城した城は敵味方ともに破却することも取り決める</u>

	<p>織田長益の実子、滝川雄利、中川定成、佐久間正勝、土方雄良、雑賀松庵は実子または母親を人質に出し誓紙を差し出す。</p> <p>信雄が勝手に和睦したという通説に対して、家康も同意していたという説もあり。</p>
11月15日	<p>信雄が戦線を離脱し、戦争の大義名分を失ってしまった家康が秀吉と講和。</p>
	<p><u>天正十二年の和睦・停戦の理由</u></p> <p>(1) 停戦前の秀吉方の戦況</p> <p>① 秀吉の戦況意識は竹鼻攻略時に変化</p> <p>竹鼻攻略時、秀吉養子の羽柴秀勝が病に臥せ、またそれ以前に甥秀次が長久手で大敗北→後継者候補の総倒れ。長陣による内部の疲弊</p> <p>② 小牧・長久手の戦いが全国規模になったことによる影響</p> <p>信雄方の全国規模の援軍要請と、それに秀吉が対応して援軍を求めたことにより、戦闘は全国規模に発展</p> <p>→秀吉は尾張局所では優勢であったが、北条や佐竹をはじめ、本願寺・長宗我部などが敵方になり秀吉領国にまで攻撃に出る恐れが外部状況として懸案</p> <p>⇒内部の疲弊、外部の逼迫した戦況により戦争長期化</p> <p>(2) 家康降伏の受け止め</p> <p>11月13日：池田恒興遺臣に宛てた書状で秀吉は「家康が実子秀康と重臣石川数正以下の人質を出すことを認め服従を願ってきた」と知らせる</p> <p>→家康が秀康を差し出したのが12月12日で、受け取ったのは26日であることから、11月13日の書状は事実を歪曲した外交宣伝であったとの説あり。しかし、<u>人質徴収は円滑に行われたとの説により、上記歪曲論への反論も有力↓</u></p> <p>(3) 家康が小牧合戦後すばやく人質を出した理由</p> <p>① 信雄が戦列を離れた直後、家康は単独で秀吉に反抗するのが困難と判断。秀吉に敵対する名分（信雄の秀吉への敵対）を失う</p> <p>② 人質とはいえ秀康を養子として迎えるという、家康の体面を重んじる形式がとられる＝秀吉が家康の実力を認めて妥協したことを意味する</p> <p>・秀吉方が疲弊していたのは事実(1)。しかし、信雄の秀吉への恭順による戦況変化と、停戦を受け入れるに際しての体面が保たれたことにより、停戦に同意</p>
11月17日	<p>秀吉、近江坂本に帰陣</p>
11月	<p>秀吉は滝川雄利を使者として浜松城に送り、家康との講和を取り付けようと試みた。家康は次男・於義丸（結城秀康）を秀吉の養子にするために大坂に送った。これで小牧の役は終了となった。</p>
11月21日	<p>秀吉、従三位権大納言に叙任され公卿となった。この際、將軍兼任を勧められたがこれを断っている。</p>
11月23日	<p>佐々成政が富山を出発。立山のさらさら越えをして浜松の家康を訪れ、秀吉への抵抗を促したが聞き入れられず。</p>
11月28日	<p>秀吉、従三位権大納言になる。</p>

1585年（天正13年）

2月22日	信雄、大坂に行って秀吉を訪問し、臣従する姿勢を示した。（貝塚御座所日記） 信雄は秀吉に従属する大名織田家の当主という立場になり、自身に味方した家康や佐々成政を秀吉に臣従させるべく務めていく。
2月26日	信雄上洛。秀吉の申し入れにより五位から正三位権大納言に任官。
3月10日	秀吉、正二位内大臣に叙任。
3月21日	秀吉、紀伊国に侵攻して雑賀党を各地で破る（千石堀城の戦い）。 最終的には藤堂高虎に命じて雑賀党の首領・鈴木重意を謀殺させることで紀伊国を平定した（紀州征伐）
4月16日	丹羽長秀、死去
6月18日	羽柴秀長を総大将、黒田孝高を軍監として10万の大軍を四国に送りこんで平定に臨んだ。秀長3万、秀次3万、小早川隆景・吉川元春3万、黒田孝高・宇喜多秀家・蜂須賀正勝2.3万。長宗我部元親の抵抗も歯が立たず、7月25日に降伏。元親は土佐一国のみを安堵されて許された。 この頃、黒田孝高が高山右近や蒲生氏郷の勧めでキリスト教に入信し、シメオンという洗礼名を授かる。
7月11日	二条昭実と近衛信輔との間で朝廷を二分して紛糾していた関白職を巡る争い（関白相論）に秀吉が介入し、近衛前久の猶子となって従一位関白宣下を受ける。
7月	北条が上野、徳川が甲斐・信濃を切り取るという盟約に対して、真田昌幸は上野国沼田・吾妻の北条への引き渡しを拒否。北条は真田の主人筋である家康に話を持ち込み、家康が甲斐へ着陣して真田昌幸に沼田領の北条氏への引き渡しを求めるが、昌幸は徳川氏から与えられた領地ではないことを理由にして拒否し、さらに敵対関係にあった上杉氏と通じた。浜松に帰還した家康、昌幸の造反を知る。
8月	家康、真田討伐のため鳥居元忠、大久保忠世、平岩親吉ら約7000の兵を上田城に派遣する。 閏8月2日 上田城に攻撃するが撃退される。 閏8月28日 徳川軍、上田から撤退
	秀吉は家康が養子として出した秀康らを人質として徳川家が従属したと喧伝した上、富山の役に際して追加の老中の人質を要求
8月	富山の役 8月4日、織田信雄の隊が京都を出陣 8月6日加賀国鳥越に布陣していた前田勢が佐々軍との交戦を開始 8月7日 秀吉は自ら軍を率いて京を出陣。 8月26日 成政、信雄を仲介に降伏を申し入れ、剃髪する 閏8月27日 秀吉、大坂に帰還
10月	島津氏と大友氏に対して、朝廷権威を以って停戦を指示する。
10月28日	徳川家、秀吉に人質を差し出すことを拒否することを決定。北条と起請文を交わして、今後の秀吉への対応を確認。 これを口実に秀吉は家康討伐を計画、美濃国大垣城に15万人の大軍のための兵糧を

	<p>備蓄。地位、戦力共に家康を圧倒した秀吉は、天正14年初めの出陣を計画していた。</p>
11月13日	<p>徳川家の実質ナンバー2だった石川数正が出奔して秀吉に帰属する</p> <p>数正は交渉役を務めるうちに秀吉の実力を知って、信雄の助言に従って人質を出すべきと考えるに至った。しかし他の家臣は強硬派が多く家中で孤立。数正が指導していた信濃小笠原貞慶が家康から離反し、失態と見なされ家中での立場を失わせた。</p> <p>秀吉は「家康成敗」として、来春の出陣の意向を示す。(松丸憲正氏所蔵文書)</p>
	<p><u>石川数正の出奔理由</u></p> <p>(1) 基本事項</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 出奔に際する周辺状況 <p>10月17日秀吉書状(→真田昌幸):松本城主小笠原貞慶と相談して落度無きように伝える</p> <p>→家康方の小笠原がこの時点ですでに秀吉方についていた</p> <p>11月:石川は出奔の折、徳川方への人質として岡崎城に置かれていた小笠原の嫡男秀政を伴っていた⇒真田・石川・小笠原の一連の出奔騒ぎ ・ 史料 <p>一次資料:11月19日秀吉(→真田昌幸)書状「石川の出奔要因は、秀吉から石川を通じてなされた家康と宿老たちへの人質指出の要求に対して家康が拒絶したことにある」</p> <p>→秀吉との融和を進めていた石川の外交政策をめぐる敗北が出奔の要因</p> <p>(2) 石川と小笠原貞慶の関係</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 本能寺の変後、貞慶が旧領信濃深志領の奪還を試みた際、石川が取り成し、家康の援助を得る <p>→その後貞慶は家康に従属。石川は貞慶の指南役となって両者を取りなす ・ 10月時点で貞慶は秀吉に通じる(上述) <p>→指南役としての政治立場を失う=秀吉との外交における発言力の信頼性喪失</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ①石川出奔は秀吉の外交成果という説、②家中からの孤立説などがありますが、<u>貞慶が早くから秀吉方に通じていたことで、貞慶指南役としての政治的責任を問われた結果、対秀吉交渉上の信頼を政権内で失った</u>という説が有力視されているようです。 <p>(柴祐之『戦国織豊期大名徳川氏の領国支配』岩田書院、2014等で言及)</p> </p></p>
11月29日 夜半	<p>天正大地震</p> <p>マグニチュード(M)8クラス、最大震度6だったとされる。</p> <p>これにより富山県高岡市の木舟城は陥没し、城主・前田秀継(利家の弟)が死亡。飛騨国大野郡(現在の岐阜県白川村)の帰雲城も城下もろとも埋没し、このため城主内ヶ島氏一族が滅亡。被害は中部、東海・北陸の広範囲に及んだ。</p> <p>大垣城が全壊焼失、信雄の長島城も倒壊。</p> <p>このとき秀吉は近江国坂本城にいたが、あまりの恐ろしさにすぐに大坂城に逃げ帰</p>

	<p>った。美濃・尾張・伊勢地方の被害が大きく、戦争準備どころではなくなっていた。</p> <p>一方の家康側は、この地震により岡崎城が被災したが、領国内は震度 4 以下だったという。ただ徳川氏の領国は荒廃しており、家康にしても豊臣政権との戦いどころではなかった。</p>
	<p>地震後も秀吉は東美濃・信濃方面からの家康征伐を計画していたが、程なくこれも中止して和解路線に転じた。</p>

1586年(天正14年)

1月	島津義久、名門島津は秀吉のごとき成り上がり者を関白として礼遇しないと表明
1月24日	信雄は岡崎城に赴き、27日に家康と面談して秀吉との和睦を図った。家康も秀吉の来襲を受けたら耐えられないと判断し、和睦・臣従を受け入れた。臣従の条件として、家康は秀吉との縁戚関係を求めた。
2月	秀吉、家康を赦免する。(一柳文書) 2月30日、秀吉は真田昌幸ら反徳川勢力に停戦を命じる。
3月	北条氏政と三島、沼津で2回会見し、両者の関係を確認しあった(西山本門寺文書)
4月5日	大友宗麟、大坂城に秀吉を訪ねて島津氏を除いてくれるよう懇願
4月	秀吉、妹の旭姫を輿入れさせることを決める。4月28日に輿入れ予定だったが、家康がお礼のために天野景能を秀吉に遣わせたところ、秀吉の知らない家臣を遣わした事に秀吉が怒り、酒井忠次か本多忠勝、榊原康政を遣わすよう求めて婚儀を延期。このいきさつで家康は秀吉との関係を絶とうとしたが、信雄の重臣土方雄良が信雄の面子を理由に説得し、4月23日に本多忠勝が派遣される。
	<p><u>天正十四年の家康の臣従の理由と豊臣・徳川の力関係</u></p> <p>※ 両者の力関係を具体的に伝える資料が見当たりませんでしたので、当時秀吉が直面していた対外的課題の側面から以下説明しています。秀吉が戦争回避という妥協を合理的に選んだ意図を汲み取っていただけないかと思います</p> <p>(1) 人質要求</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 秀吉は佐々を降伏させ越中を手に入れたのち、家康に宿老人質の指出を要求するが、家康は10月28日に家臣談合の末、これを拒否 ・ 小牧役ののちの天正14年5月、秀吉は自身の妹を家康に嫁がせる準備を整えたが、依然として家康宿老から人質を取ることにこだわっていた <ul style="list-style-type: none"> …家康から「人質誓紙」が秀吉に寄越される(5月16日付秀吉→上杉書状) 井伊直政・榊原康政・本田忠勝等の親族が人質として家康上陸前に使わされる(9月-譜諫余録〈徳川家による後世の記録のため要注意、婚約前後に人質が秀吉に渡されたと考えられる〉) →家康宿老の人質・秀吉妹の輿入れの交換条件が成立 ・ 当時、政略結婚した女性は人質とは異なる存在として生命の安全を保障すべきという観念はあったが、実際は人質同然に殺害される可能性→政略結婚が人質と同等の機能

	<p>※ 上記のように、自身の妹を興入れするという譲歩の必要性に迫られるほど、秀吉は家康からの人質指出にこだわっていた様子がうかがえます。人質獲得という要求がまがりなりにも通ったことで、戦力をわざわざ割いて家康を滅ぼす必要性はなくなったのではないのでしょうか（下記(2)の九州地方への戦力需要もあり、ここで開戦する余裕もなかった）</p> <p>(2) 九州地方の情勢</p> <ul style="list-style-type: none"> 一方秀吉は、九州に発した停戦令に服従しない島津氏への対応に迫られていた。九州平定のため毛利勢を派兵するが、家康との関係が微妙な段階にあって、毛利が九州の状況に応じ秀吉に背を向ける恐れも懸念 →秀吉・家康の政治的緊張関係のなかで秀吉は容易に畿内を離れられず、九州への対処は毛利らによって担われる。しかし、手放し状態となった九州の逼迫する戦況も 家康臣従後の天正 15 年 1 月 1 日、秀吉は九州出陣のため諸将出立期日や部署を定める。 …宇喜多秀家（1 月 25 日）/豊臣秀長（2 月 10 日）/秀吉（3 月 1 日） <p>※ 磯田道史氏などが天正地震を停戦理由のひとつとして挙げておられます（『天災から日本史を読みなおす』）。家康の岡崎より秀吉方の美濃一帯の方が比較的被害が大きく肯首しうる説です。しかし、政治的状況からも、和睦に踏み出す環境は十分にあったのではないかと思います。</p> <p>上記の通り、秀吉は停戦令に応じない九州の島津に手を焼いていました。そのため、九州に畿内の陣を割く必要があり、一先ず冷戦状態にあった家康と和睦を結び、安心して九州征伐に向かおうとしたのだろうと考えられます。</p>
5 月 1 4 日	旭姫、家康のもとに興入れする（家忠日記）
7 月	秀吉は木曾、真田、小笠原を家康に帰属させることを約束したが、真田昌幸は拒絶し人質も差し出さなかった。そこで秀吉は家康に真田成敗を許可する。（唐津小笠原家文書）家康は出陣の準備を進める（家忠日記）
8 月	上杉景勝のとりなしによって秀吉は真田を放免（上杉家文書）、真田成敗は中止。
9 月	秀吉、正親町天皇の譲位式を控え、臣従の証として一刻も早い家康の上洛を求める。
9 月 9 日	秀吉、正親町天皇から豊臣の姓を賜る。
9 月 2 6 日	家康、秀吉の使者である浅野長政らを交えて岡崎城で協議。家康は上洛中に危害が及ばぬよう、身の安全に対する保証を求めた。 秀吉は母・大政所を人質として家康のもとに送ることを決める
1 0 月	黒田孝高、九州の島津家征伐のため豊前に上陸
1 0 月 1 4 日	家康、浜松を出発して上洛に向かう
1 0 月 1 8 日	大政所、岡崎城に入る。

10月26日	家康、大坂に着き秀長の屋敷に入る。
10月27日	家康は大坂城において秀吉に謁見し、諸大名の前で豊臣氏に臣従することを表明。豊臣政権ナンバー2の座を確保し、将来に備えることとなる。
11月5日	秀吉と家康、上洛して参内する。家康、正三位権中納言に任官（秀長と同位であり、一門衆に匹敵する親戚としての扱い）
11月7日	正親町天皇の譲位式、家康も参加
12月25日	秀吉、太政大臣に就任して豊臣政権を確立させる。

1587年、秀吉は信雄に正二位内大臣という関白に次ぐ位を与えて功績に報いる。